

No. 380【2019年11月1日配信】

藩政時代の青森と松前・蝦夷地 (担当:工藤)

こんにちは！ 室長の工藤です。

今年は青函ツインシティ 30 周年で、さまざまな記念行事が行われています。そこで今回は範囲が少し広がりますが、藩政時代の青森と松前・蝦夷地にまつわるテーマで執筆することにします。

今から 320 年程前の元禄 8 年 (1696) 8 月、出羽国にある天領 (江戸幕府の直轄領) の米を運ぶ船が (恐らく日本海沖で) 破船するという事故が発生しました。

これを受けて鱒ヶ沢町奉行は、この船の道具などが沿岸に漂着したら報告すべきという廻状 (順次回覧して用件を伝える文書) を受け取ります。そしてこの廻状は、鱒ヶ沢から松前へ通知することになっていたのですが、この時の鱒ヶ沢町奉行の対応が面白いのです。すなわち、指示通りに行くと十三から外浜にかけての沿岸地域に伝達されないで、鱒ヶ沢から浦伝えに青森まで伝達して、青森から松前に伝えることを藩庁に上申したのです。鱒ヶ沢町奉行は、松前への情報伝達は青森を介すべきと考えていたのでしょう。

実は、当時の弘前藩庁は、青森町に松前・蝦夷地の情報センター (窓口機能) を担わせようと考えていた節があるのです。たとえば、元禄 7 年 7 月 4 日午時 (正午) 頃から弘前城下で地震が発生しました。そして、夕方には北の方角に光が見え「松前山 (駒ヶ岳)」が噴火したのではないかと噂が立ちました。これを受けて藩庁は、青森町奉行に情報収集を指示しているのです。青森町奉行では、7 月 6 日に松前の知内を発ち 8 日午後には青森に着岸した船の船頭から事情を聴取して藩庁に報告しています。

また、元禄 9 年 8 月、青森町奉行は蝦夷地に漂着した「唐人」について報告しています。まさに青森町が、松前・蝦夷地の情報のセンターであったことを示す事例です。ただ、この時に松前藩の本陣を務める塩町の庄左衛門が、この一件を幕府に報告するために派遣された松前藩士から聞き取った文書も併せて報告しています。庄左衛門の報告は、町奉行のものよりも詳細で、青森町人の情報収集能力の高さをうかがうことができます。

青森町は本州と松前・蝦夷地とを繋ぐ玄関口という地理的条件に加え、青森町人は松前藩士、両地域を行き交う船の船頭や商人などを通じて松前・蝦夷地の情報を得ることができたのです。つまり、「港町」青森は単に物資輸送港・廻船の寄港地というだけではなく、それに関わる人のネットワークがもたらす「情報」の集積地でもあったのです。



ツインシティ提携 20 周年を記念して制作された「赤い糸モニュメント」